# 王歌

kunio ogawa

小川国夫

# 王歌

小川国夫

角川書店

王歌

昭和六十三年一月十二日初版発行

著　者　小川国夫
発行者　角川春樹
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話　営業部〇三―二三八―八五二一
編集部〇三―二三八―八四五一
振替口座　東京三―一九五二〇八　〒一〇二
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
Printed in Japan ISBN4-04-872478-9　C0093

王

歌

装丁　菊地信義
装画　平野　遼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

夏だった。ベトレヘムからギベアまで、いたるところで芥子(ケシ)が花盛りだった。どこまで行っても、道は澄みきった空の中に消えていた。道の果てに早くギベアの家々を見たかった。木陰があると坐って、一人竪琴を弾いた。その竪琴の枠はエッセの家に古くから伝わっていたもので、先祖にはうまい弾き手がいたことをダビデは知っていた。彼らには遠く及ばないと、最近まで思っていたが、最近になって、そんなこともあるまいと思うようになっていた。ギベアを前にして野宿した時には、胸の昂りを抑えるために、晩くまで弾いていた。調べは星の明滅と呼応した。

# 一章

ダビデは壁から竪琴をはずし、弾き始めてみたが、気乗りしなかった。出だしが悪い時には、いい音が出てくるまでに手間がかかったし、いい音が出てくるころには、王はもう聞く気をなくしている破目になることがあった。その日は駄目だった。弾く手を止めて王の方を見た。王は柱を擦って揺れている石榴（ざくろ）の葉を見ていた。ダビデは少しためらい、小声で口をきった。

――聞いていただけませんか。

――鳴らし続けろ、とサウルはダビデを見ないで言った。

――音が埃になる気がします。舌も乾いてひび割れてしまいます。

――お前は何のために生まれてきたのか。

――琴を置いて、王の気がかりをとりのぞきましょう。

――俺の気がかり……。一体、何のことだ。

――ゴリアテという男を殺しましょう。

――そんな駱駝の骨のことが気にかかっているわけではない。
――ゴリアテを殺しましょう。殺さなければ、私の琴にも私の口にも神は来ません。
――……。
――ダビデには勝利の歌しかありません、イスラエルが戦に敗ければ私の歌も滅びるのです。
――あっと言う間にくたばってもいいというのか。
――歌が滅びるのなら、同じことです。
――そうか、それなら、テレビンの谷の戦列へ行ってみるがいい。お前が言い出したことだ、サウルを恨まないようにしろ。

サウル王はダビデをろくに見ていなかった。言い終るとダビデに背を向けてしまい、また震える石榴の葉に眼をやっていた。そして振り返った時には、もうダビデはいなかった。壁に竪琴が懸けてあるだけだった。

ダビデはまぐさ置場へ行った。そこが彼の寝床だった。まぐさの下から、煎った麦粉と十個のパン、それと十個の凝乳の入った袋を引きずり出した。昨日郷里の父を訪ねた時、煎った麦粉とパンは陣にいる二人の兄に届けるように、凝乳は隊長に差しあげるようにと、託されたのだ。父はそれをダビデに手渡しながら、兄たちの消息を聞き、給料を持ち帰るように命じた。

ダビデは袋を杖にしばりつけてかついだ。途中の涸川(かれかわ)でなめらかな石を選んで拾い、腰に吊した

革袋に入れた。帯には石投げの紐もはさんであった。
谷からはどよめきが湧いていた。ダビデは一旦兵糧車の列の陰に入り、荷物番に食糧の袋をあずけ、戦列へ走って行った。見渡すかぎり大岩がわだかまっている所だった。しかし、近づいて行くと、岩の隙間に茶色の蝗のように、イスラエルの兵隊たちがもぐりこんでいた。最初に出会った兵隊に、
――シャンマを知らないか。エリアブでもいいが、とダビデは聞いた。
――どこのエリアブだい、と兵隊は言った。
――ベトレヘムだ。エッセの息子だ。
――なんだ、雑兵のことか。
――お前は雑兵ではないのか、とダビデは言い捨て、岩の間をジグザグに前へ進んで行った。
兄は見つからなかった。ダビデの口は乾き、眼は見開きすぎて瞼が痛かった。沼のような薄闇が疲れた脚を包み、頭上の夕映えの深みから星が浮かんできた。ダビデは兵隊たちが残した食糧を拾って食べ、岩の隙間に嵌りこんだ。
眠ろうと思った。星空がぼやけ、冷たい風が体に切りこんで来そうだった。眠れば、それも気にならなくなるだろう、今日はもう終った、朝が来たら、ひとに言づてを頼んでもいい、と自分に言い聞かせた。

ダビデは殴りつけられた。眼を見張ると、鼻先に兄のエリアブがしゃがんで、こっちを見つめていた。

――お前はだれだ、とダビデは寝惚けて言った。

――何で来たのか、とエリアブは言った。

――兄さんだな。会えてよかったよ、兄さん。届けるものがあったんだ、父さんに頼まれて。麦粉とパンだ。

――兵糧隊にあずけておけ。

――兄さんたちが元気かどうか知りたかったんだ。

――嘘をつけ。

――嘘……。

――お前が来たのは、戦を見たかったからだ。生意気に。お前がここへ来て、一体、何になる。せいぜいサウルの鬚の下で竪琴でもかじって、安い手当てを貰っていろ。

――なぜそんなに怒るのか、ここへ来るだけでも悪いというのか。

――来ようなどとも思うな。羊の群れを放り出して来たな。俺が継ぐべき財産を、だれにあずけたのか。貴様が出しゃばりでずるがしこい根性の餓鬼だということぐらい、俺が知らないと思うのか。

――俺のことを恥に思っているのか。
――帰れ。
ダビデは上半身を起こし、膝を抱えて足もとを見た。口惜しくて肩を震わせていたが、しばらくして、
――帰らないよ、死んでも、と言った。
――血迷うな、羊飼い、とエリアブはダビデのこめかみを爪ではじいた。
――うるさいぞ、とかたわらに寝ていた兵隊が言った。
エリアブもダビデも黙っていた。ダビデは自分の胸の鼓動を聞きながら、もう寒くはない、と思っていた。
――だれだ、お前は、とまた兵隊は言った。
――山犬だよ、とエリアブは言って立ちあがった。
ダビデは、
――兄さん、兵糧車の番人から麦粉とパンをとってくれ。俺があずけておいたからな。凝乳もあずけておいた。お前の隊長にやってくれ、と言った。
――早く帰れ。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

## 二章

ダビデは寝転がり、眠れないので寝返りを打った。彼はうつ伏せになり、石の枕に頬を押しつけた。顔を歪め、口を開いて眠った。醒めると、もう明るくなっていて、周囲にどよめきが湧いていた。彼が耳を澄ますと、どよめきを通してゴリアテの声が聞えた。これが人間の声か。空気の中へ押しこめられて、いつまでも消えない唸りだった。

ダビデは岩のはずれに進み出て、ゴリアテの姿を見た。ゴリアテは遠い平原にいて、アカシアの木から木へ歩いていた。眼を疑うほど、大きな褐色の塊だった。

槍の穂先が時々光るだけだった。ダビデにとって、それは武器の光ではなかった。自分がゴリアテに触れた瞬間の、稲妻の予感だった。ダビデは、自分の体内にその稲妻が秘められていて、噴き出したがっているのを感じた。

ダビデの体は、この時にもまだ冷たく澄んでいた。彼は眼を細めて自分とゴリアテとの距離を、ゴリアテの大きさを、ゴリアテの体恰好や細かな癖を見きわめようとした。

ダビデにははっきり聞き分けられなかったが、ゴリアテの言い分は以下のような意味だった。ゴリアテはペリシテ人の言葉であざけっていた。

――貴様らが、戦をしようと出てきたのは、どういうわけか。俺は独立したペリシテ人だが、貴様らはサウルの奴隷ではないか。俺と一騎打ちして、死のうという者はいまい。もしいたら冥府(よみ)へ送りこむ前に賞めてやろう。俺を殺したらどうだ。殺すことができたら、ペリシテ人もサウルの奴隷になろう。奴隷にするか、それとも、奴隷になるかだ。俺たちも奴隷が欲しい。だからこそ殺し合いをしている。

ペリシテ人の諸国の一つにガテがあり、ゴリアテはガテの出身だった。背丈は八尺あった。青銅の兜をかぶり、青銅の鱗の鎧を着ていた。脚にも青銅のすね当てをつけ、やはり青銅の投げ槍を背負っていた。その棍棒のような投げ槍の穂先は鉄で、穂先だけが一貫目以上あった。郎等が盾を持って彼の前を歩いていた。

## 三章

ダビデはゴリアテから眼を離すと、うつむいて黙りこくり、夢遊病者の足取りで、サウルの陣営まで戻った。その時サウルは兵営の外に出ていて、石榴の木に槍を立てかけ、アブネルと話をしていた。ダビデは坂を登りながら、近づいて行った。サウルは疲れているのらしかった。顔色はどす黒く、まるで脆い泥人形だった。

——ダビデの申しあげることをお聞きください、とダビデは言った。

——あとにしないか、とアブネルが叱った。

——いいだろう、今となってはダビデだけが友だ、とサウルは言った。

——どういう意味ですか、とアブネルが言った。

——ダビデも俺のように窶(やつ)れている、とサウルは苦笑しながら言った。

ダビデは棒を呑んだように立っていた。足もとも頼りなく、石榴の葉影がまといつくので、波にもてあそばれて、抜けて浮きあがりそうな杭を思わせた。しかし、眼だけはすわっていて、暗く輝きながら、無礼なほどまともに、王の眼を覗きこんでいた。

——昨夜あなたは祈りました。燔祭(はんさい)を捧げましたね。しかし神はお応えにならなかった、とダビデは言った。

——図星だ、と王は、ひるんだ顔になった。

この人も弱味を現すようになった、もう怺(こら)えきれなくなっているのだ、とダビデは感じ、

――ゴリアテは私が殺します、と言った。
――ゴリアテという男が生きていようが死のうが同じことだ。ダビデが生きていようが死のうが同じことのようなものだ、とサウル王は言った。
――殺さなければなりません。ゴリアテが冥府（よみ）へ降れば、イスラエルは天へ昇ります。
――神の告げは、そうも言っていなかったが……。
――昨夜王には、神のお告げはありませんでした。今日も闇が立ちこめています。
――のぼせるな、小僧。
――イスラエルが闇です、とダビデは言い募った。そして、
――一人で一人のペリシテ人を殺そうとする者が、イスラエルにはおりません、と続けた。
――お前ならひょっとして殺せるというのか、とアブネルが口を挟んだ。
――神の恵みがあるなら、とダビデは言った。
――お前が殺されるのはいいとして、癒らないほどの傷を負ったら、勝手に神を恨むのか、とアブネルは聞いた。
――だれも恨みません、とダビデは言った。
サウル王の大きな眼はダビデを包んでいた。今は遠く感じられる自分の少年時代が、一気に近づいてきて、現実となったように錯覚した。この少年がゴリアテに勝てるとは思えなかった。だから

サウルは、神の督励の犠牲(いけにえ)となる者への心の痛みと、その興奮の中で死ぬことができる年齢への羨ましさを感じていた。向う岸へ突き放そうか、それとも引き留めようかと、彼はしばらく迷っていたが、

——こっちへ来い、とダビデをうながし、先に立って自分の部屋へ入った。

サウルは自分の鎧をダビデに着せた。胸当ての革紐を、王の従者がからげ終ると、王はダビデに剣を手渡した。ダビデは震えながら、その革紐を帯の環に通していった。それから、やはり手渡された兜をかかえて立った。王たる者の武具はすべてダビデに丁度よかった。しかし、ダビデは活気を失っていた。苦しげに顔を歪め、

——これをつけては戦えません。脱がしてください、と言った。

——どうするのか。

——鎧も着けず、槍も剣も持たないで参ります。

——……。

——王よ、私があの無礼な巨人を倒したら、褒美に何をくださいますか。

——驢馬をやろう。

——三頭いただけますか。二人の兄が陣におりますが、驢馬を持ちたがっております。兄弟が一頭ずつ驢馬を持ちたいのです。

――お前には驢馬の代りに、俺の娘を一人くれてやってもいいぞ。
――私の父の家の税を免じていただきたいのです。父はエッセです。ベトレヘムのエッセです。
――知っているぞ、お前は俺の息子になるわけだ。息子の家に税を課しはしないぞ。
――この約束はアブネルが聞きました、とダビデは戸外にいるアブネルを振り返りもしないで言った。
アブネルは耳ざとく聞きつけていて、
――抜け目のない貧乏人が、あつかましい、と言った。
――エッセの家の税を免除するぞ。その眼でその日を見るようにしろ、とサウルは言った。
ダビデは床に置いた鎧に剣を立てかけ、まるで重荷から解放されたように、素速く立ち去った。やって来た時の頼りなげな様子が嘘のようだった。サウルは後ろ姿を見つめながら、こいつは自分の運命をどう感じているのだろう、と思った。サウルはゴリアテが殺されることを期待してはいなかった。神は知っている。殺されることが全くないとはいえまい、殺されたとしても、それがそれほどの戦果なのだろうか……。果たして俺は戦果が挙がることを心から望んでいるのだろうか、心が砂嵐のように深く濁っていて、自分でも見きわめられなかった。ただダビデがけなげなことが嬉しかった。神に酔ってわれを忘れていることが羨ましかった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.